

第四節 聖地、神社

聖地としてはテイガナシ（岳加那志）と称し。湧泉を主要条件とするために、丘陵上にはなく、村落を離れた緩傾斜面にあり、神を奉ずる者がこの湧泉で禊（みそぎ）を行うのである。その周辺には阿壇（あただん）、その他雑木が茂っているのが特色で、ここへ入ることを忌み嫌った。現在喜美留、西原の両字に残っている。

また、祝女（のろ）の祭場であった所をフーナーといい、そこに屋敷構えをして屋号としたのが残っている。ヌルバンタ（ヌルバンドー）の地名もある。シニグ祭の祭場をシニグドーといって、ほとんどの字にあった。

シヨージゴも聖地といえるのではないだろうか。

神社については世之主と四並蔵は本島古主の崇廟（すうびょう）として全島民が尊崇してきたものであるが、明治に入り仏

号が廃せられ、内城と徳時に神社を建立した。薩摩時代に鹿兒島から分祀（ぶんし）された弁財天宮、金毘羅大

権現、お天神、高千穂神社が建立され、本島の神社は六社となった。

明治十一年諸事改正令達によって、高千穂神社を郷社とし、その他の五社は村社とし、三十六か村の人民各社の近傍に沿って氏神とした。しかし、戸籍には全島民すべて氏神は高千穂神社と記す。また、祭日は高千穂、世之主の両社にて各村年番で奉納手踊りを行っていたが、その風儀行装が今日の教化に障害があり、出費も多く、明治十一年秋よりこれを廃し、祭式だけ行うことになった。

神官は高千穂は祠官（しかん）一、祠掌（ししやう）一、その他五社は詞掌各一名とする。高千穂の祠官は明治九年、詞掌六名は明治十一年任命されている。明治五年ごろ各神社に社祠伶人数十人本島より任命されていたこともある。

当時の氏は次のとおり各字に割り当てられていた。

巖島神社（弁財天宮）……和泊、和、手々知名、古里、

皆川

金毘羅神社……喜美留、出花、西原、国頭

菅原神社……手々知名、畦布、根折、瀬名、永嶺

高千穂神社……全島民

の金刀比羅宮から求めてきたものといわれている。

建立 文政六年癸未（一八二三）西原と出花と喜美留の中間の尾根の原頭、小字コン平に建立。

○ 文化年間（一八一―一八二三）代官太田筑左衛門（文化八^{ひつし}未^{とし}年^{とち}十四年）が金比羅社殿内に松の植樹をした記録があり、もっと以前から石碑を立てて拝んでいた。

○ 神社裏手に高さ八十七センチほどの男物を思わせるような石碑が立っている。これは昭和五十二年喜美留・西原・出花の老人クラブが清掃作業の時松林の中に埋もれていたのを探し出して建てたもので、古老の話では昔この石碑を拝んでいたことである。正面右側に奉建立、中央に金毘羅權現、左側に為海上安全と刻まれ、裏面には文政七年申十月十日（一八二四）木脇祐友と刻んである。

○ 御手洗鉢 高さ七十センチ、直径三十五センチの八角形の石材手洗鉢がある。正面に天保十四年卯（一八四三）六月吉日奉寄進原田孝太郎、住祐丸と刻んである。

○ 弘化四^{ひつし}未^{とし}年（一八四七）に代官和田平太代附役山之内斉之進が金毘羅並松植樹の記録あり、挿絵のように参道に松並木が景観を添えていたが、耕地整理により伐採され参道も畑地になり東側に新道ができていた。

○ 弘化四年未（一八四七）七月大嶺御札相下り金毘羅堂新造立にて御札建立の事の記録がある。

○ 嘉永二年酉（一八四九）六月金毘羅大權現社殿新築大嶺札合祀す。抑々従前は松林原頭石碑を建て崇拜しおれり、うんぬんの記録がある。前述の碑である。

○ 文久より明治末年の間風災により松木枯損。

○ 明治四年末（一八七一）金毘羅を大物主と改号。毎年三月十日、十一月十日祭日と定め置く。

○ 明治十六年末十月（一八八三）大物主神社改築。従前御神体石碑を御神鏡に奉遷。

○ 昭和四十一年九月十日奉納池田秀久と刻名の鳥居と奉納福山茂雄と刻名の御手洗鉢がある。いずれもコンクリート造りである。

○ 戦後祭礼も中断したが、老人クラブによって復活され、自動車の交通安全祈願も行われるようになった。

○ 神社から南へ三〇四百メートル離れた旧参道入り口に池当溜池^{イチシントため}があり、そのほとりに大きな石が三つウ

ワアマ石、いま一つが馬石^{マイケン}といって馬の形をして子供たちが乗って遊んだものである。昔、西見国内兵衛佐がウワマ石の一つに頭をのせ、二つに足をかけて寝たという口伝も残っている。その辺は空き地になっており、そこでシニグ祭が行われていたといわれている。また、反対側にテイダゴ侯^{また}と呼ばれた深い溝があり、そのそばの路傍にテイダゴグムイとかいわれた大きな石があった。それには太陽を示すかのような円いくぼみがあり、回りに川を表すかのように二〜三本の筋があつて、それが自然にできたものか、人工であるのか不明であるが、すばらしい出来映えで、「テイダヌアミユヌ ホー」（太陽の浴びる川）といい、神石として洗米を供えて祭っていた人もいたと古老が語ってくれた。

耕地整理によつて、かつての参道も松林もなくなり、新しく東側に道路ができています。シニグドウもテイダゴ侯も畑地になり、これらの石も見えなくなつていたが、昭和五十九年五月池当溜池をさらえた時ウワマ

石が出てきたのを金毘羅神社境内に移した。

テイダゴグムイ石はテイダゴ侯に埋められたのではないかといわれている。

三 菅原神社

天満宮ともいわれ、島では「ウテイジン（お天神）」といつて尊崇されている。学問の神としてのみではなく家内安全、病氣平癒なども祈願し参籠もしたことがあつたといわれている。

祭神 竹原道真公の御霊

御神体 御神鏡、菅原道真公をかたどつたと思われる

石像がある。高さ三十センチ、幅二十センチ。

建立 年月日不詳なるも明治二年ごろといわれている。

○ 国頭の宇竿山^{うす}からコン平^びを通じて越山に至る尾根に上手々知名の字があり、神社は小字寺侯の傾斜面の腹に東南を向いて建てられている。周辺は生い茂った松や雑木林であつたのが、裏手を崩して運動公園を造つたので、古松や雑木は伐採され、表参道右手にわ

ずかに雑木が残っている。

- その参道を下りた右側に泉が二つあって、宇民は飲料水その他の用水として利用し、また、参けい者は御水洗として口や手を清めていた。上の方の泉はシヨージゴーとして使用していたそうである。

- 明治四年辛未（一八七二）天神を菅原神社と改号、毎年二月二十五日、十一月二十五日を祭日と定める。
- 現在の社殿造営に当たり、正面上方に寄進者として、奉納永野圭介と刻名されている。

四 高千穂神社

祭神 瓊瓊杵尊、彦火火出見尊、神武天皇
御神体 御神鏡

- 建立 明治二年己巳（一八六九）代官面高与蔵が高千穂神社御正体神鏡を守り下り、和村サダリ松山の内へ建立、小字赤平で和泊の街を眼下にし、太平洋を望見できる高台にあつて景勝の地である。

- 明治十年丁丑（一八七七）十月二十九日、戸長、神官へ心得令達の中に「高千穂神社は全島の崇廟たるを

以て、県治以来郷社とし、その他の神社は皆付（宇）社とし、戸籍には全島人民すべて高千穂神社を氏神とし、明治十一年改正の戸籍も氏神を高千穂神社と記すなり。」とある。

- 毎年大祓式、元始祭、遥拝式等を行うこと。
- 明治四十四年辛亥（一九一）十月神殿拝殿兼併の処更に神殿九尺角新築する。
- 戦後相撲協会が中心になり奉納相撲が行われ、両町はもちろん島外からも選手が来て盛大に行われた。徳之島出身の朝潮も力士になる前島島したことがある。
- 昭和五十三年十二月二十一日大相撲一行が来島。北の湖・輪島・若乃花の三横綱、大関貴ノ花、人気力士高見山などが神社土俵で奉納興行が行われ、島中を沸かせたこともある。
- 現在は町内だけの小中学校生、青年、一般の若者が毎年奉納相撲を行っている。
- 拝殿前に高さ百九十五センチの石材灯籠一対があり、御神燈、奉納者 医師永野圭介、全永野秋子、昭和十五年旧九月十九日と刻銘がある。

五 世之主神社

島の守り本尊として尊崇され、往年は祭日に島中の人々が参拝し、催し物も行われ盛んであつたが、戦後は一部の人たちによって祭典が守り続けられてきている。

祭神 世之主加那志

御神体 高さ約六十センチで彩色が施してあり、衣冠束帯姿の座石像と御神鏡、さらに神殿の中にはさびた一振りの刀身がある。

奉納 明治四年、土政照の銘のある花瓶と清明、平安統と刻銘のある絵馬（扁額）が神殿の中に納められている。

建立 建立年月日は不詳であるが、内城の越山尾根の一峯の山頂、小字上城の世之主の城跡に建立され

- ており、鳥居が遠く玉城方面からも望見される。
- 明治四年世之主および四並蔵（知名町徳時）従来仏祭のところ神社に改称し、世之主神社は風災に堪えかね山頂から数百メートル南方の峯の中腹の禅王寺跡へ建立する。

- 明治三十五年旧跡（城趾）へ帰転尊崇致し度内城人民の希望により、和泊方二戸金二銭、人夫知名方の内、上城、下城、久志檢、赤嶺、上平川、下平川、屋者、余多は人夫寄付を以て敷地引き下げ社殿を建築す。との記録がある。

- 神社境内ならびに周辺の今昔

越山連峰の一峰の頂上にあつて、琉球王朝時代に本島は北山に属し、島主世之主の居城の跡で、南方に峰々を越えてはるかに与論島と沖繩が重なつて望見され、東方も峰々の上から遠く大城、玉城の宇をさらに茫洋たる太平洋を眺め、北、西方に本町の多くの集落が緑の中に点在し、国頭岬があり、東シナ海を、その先に徳之島が横たわっているのが見え、史跡として、景勝地として観光客が足を運んでいる。しかし、戦後その趣を一変してしまつた。

参道は表門前に幾つかの峰が続いており、そこを切り開き人が一人通れるぐらゐの狭い道で、道の両側は丈余の壁で昼でも暗く、しかも迷路のように幾筋かあつて、神社に至るには容易でなかつた。牛に稻などの荷物を積んでここを通るときには入り口の方で声を掛け合い一方

を待たせてから通ったものだと言者が語ってくれた。この切り通しの頂上には島つづじが群生しており、花のこの景観はすばらしいものがあった。

民謡にこの集落グスク（内城）の特徴をつかんで相聞歌に託したものがある。

イチャ カナシヤアタイム グスクヤードチ シンナグスクマタジマジ テインドウ マブユル
どんなに好きで愛していても、内城へ嫁入りするな（嫁入りすると）内城の谷間で、天だけ眺めて暮らすようになるんだよ。その返しとして、

ミリヤ ウトウルシヤヌ グスクマタジマヤシガ
サトウニ ウミナシヤ クルマトーバル

見ると、大変な内城の俣シマ（字）ではあるがあなた（男）に思い込んでしまえば原っぱである。

とあるとおり、山峡やまがけの集落であったが、漸次畑地などの広い所へ屋敷替えし、現在は十数軒だけとなっている。

しかも戦後開発事業により山は崩され畑地になり、迷路もつづじもなくなり、アスファルトの新道が神社周辺を走り、往年の面影を失い、それでも一部にその姿をと

どめている。

正門数十段の階段を上りつめると、丈余のコンクリート造りの鳥居があり、その奥に石垣に囲まれた社殿がある。石垣の外側は高台になっており、左側は広場で昔ここで本シニグ祭が行われていたといわれるが、そのシニグ祭も明治三年を最後に絶えている。それでも例祭には島民が参けいし、曲がりくねった



図4 世之主神社旧参道想像図

れるようになった。

社殿の裏左隅に小さな祠堂があり、その中に頭部のない小さな石仏が祭られている。禅王寺の遺物ではないかと思われる。ここは天然痘やはしかなどはやり病の治病の神として往年は信仰されていたということである。

六 南洲神社

祭神 西郷隆盛御霊

御神体 御神鏡

建立 明治三十四年一月二十七日西郷神社遷霊鎮座、

手々知名小字兼久の地、奥川のほとり旧メンチ屋敷（町田精男氏）跡に建立。同年一月十七日に川

を隔てた和泊小字雲登の岩鼻に南洲翁の記念碑が建立されており、かつてこの地に西郷の牢獄らうごくがあったと伝えられている。

○ 社殿前に黒みかげ石の立派な御手洗鉢があり、高さ五十センチ、幅六十センチの飾り鉢である。奉寄進、山森泰蔵、森田善太郎、梶原喜三次、中馬徳平、菊谷宗次郎、斎藤友次郎、明治三十四年十二月とそれぞれ

四面に刻まれている。

○ また一對のコンクリート造りで、高さ二メートル近い灯ろうがあり、沖縄県人会一同、昭和十二年七月吉日の銘が刻まれている。

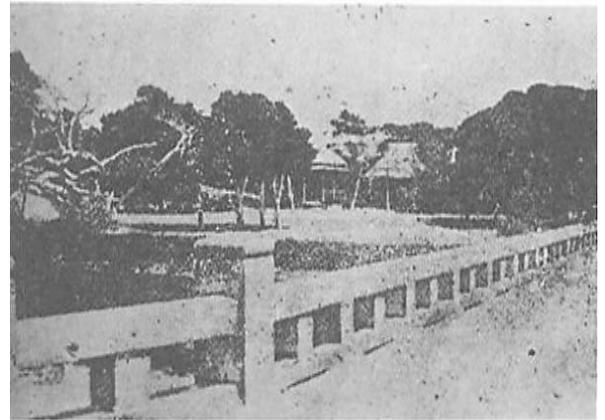
○ 西郷南洲先生天立像建立、南日本放送会長長島中季隆氏が西郷先生没後百周年を記念して寄贈されたもので、昭和五十三年八月神社横に築山を背景に建立され、八月十二日にその除幕式と記念行事を催し、県、郡の方や関係者多数をお招きし盛大に行われた。

○ 西郷文庫 明治四十三年境内北側に建設、三百五十円和泊村が支出、和泊、手々知名大字各々五十円をきよ出する。文庫は神官であった玉江柳曹（手々知名出身）が管理し、昭和初期まで学習の場であったが、現在はない。この地はいまでも文庫と愛称されている。

○ 日曜学校 戦前までは子供たちが日曜早朝暗い中からホラ貝や竹筒を吹きならし露路を回り、みんなを起こし組ごとに露路から本通りを清掃し、最後は境内を清掃して礼拝を行って後、先生方のお話があり、中でも村長、県議を務められた沖元綱先生のお話は子供たちの精神生活の糧ともなったものである。日曜学校の

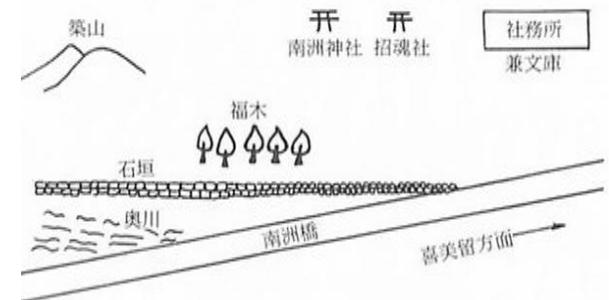


11 明治34年建立の南洲神社（昭和2年）



12 南洲橋上から写した南洲神社と招魂社（昭和2年）

図5 昭和2年当時の南洲神社境内略図



歌もあり、手々知名青少年の修養道場ともなっている。

○ 戦後は道路もよくなり、道路清掃はなくなったが、日曜や夏・冬の休暇中は朝境内の清掃後ラジオ体操、ジョギングが行われている。日曜学校の伝統は明治時代から続いているもので、西郷翁の遺徳をしのばせる

行事である。

○ 昭和五十二年西郷南洲顕彰会が結成され、出版物発刊や行事が行われている。

七 招魂社

祭神 日清・日露戦争、大東亜戦争の戦没者の御霊

御神体 御神鏡、戦没者数百柱の位牌

建立 明治三十八年乙巳三月三十日、西郷神社境内に和泊招魂社遷座。現在南洲神社と並んで建てられている。

○ 御手洗鉢 正面に十八弁菊の紋章、その下に「英霊よ安らかに眠り下さい」側面に昭和四十二年十一月、贈山田三十茂と刻名がある。

○ 灯ろう コンクリート造りの一対で、昭和四十八年六月、福山清定の銘が刻まれている。

○ 祭礼は毎年十一月に戦没者の遺族会が中心に行っている。越山頂上に忠霊塔が建立されてから、神社で式典を済ませ、越山忠霊塔を参拝し、戦争生存者による懐古談が語られる。その後昼食会で演芸が催される。

八 禅王寺

沖永良部島郷土史資料によると「世之主時代（五百八十年前）に始めて仏教輸入せらる。平安統氏の記録によれば首里天王寺より観音一体、僧一人を招致して内城に寺舎を建つとあり禅王寺是なり。其後薩摩谷山郷より禅僧渡来し布教に従事せり。内城の東城氏の祖なり」という。尋いで内城へ宮松氏代りて僧となりたるも明治六年廃止したり。」とある。

沖永良部島に仏寺が建立されたのは、記録のうえではここだけで、古い墓石に禅宗の戒名が刻まれているのが残っており、元禄の年号の刻まれているものもあり、また、平安統が与人に任命されたのが、享保十九年甲寅（一七三四）で、弁天様が建立されたから三十年後であり、本島に寺社として建立されたのは弁天様と前後して建立されたものではないだろうか、徴すべき文献もなく、推測の域を脱しない。

また、手札改とは在住人員を調査して、切支丹宗なき旨を藩庁へ報告すること、八年ごとに行い、出生・

死亡・結婚・養子縁組みの加除相続、転居の戸籍整理をすることで、戸籍簿のことを宗門手札改帳という。全島禪宗という名義なるも理由は知らず、和気家の祖先のみ浄土宗に属せり。と郷土史資料にあり、墓碑銘も考え合わせる。と禪宗の布教が徹底していたようにも思われる。

禪王寺の開基によつて涵養された仏教思想は、葬祭習俗を著しく仏教的ならしめた。現代でも老人たちが、お宮もうでを「テイラメ（寺参り）」と言うのはその名残である。

明治六年廃止とあるが、明治四年にこの寺跡へ世之主神社を移転したことになる。

この寺跡は寺敷といわれ、内城小字上城で世之主神社から数百メートル南方へ下った丘の上にあつたが、その丘は崩され現在は畑になっている。

九 岬大明神

私たち人間の祖先は海のはるか向こうの世界（ニライカナイ）からきたもので、その上陸地が岬であると考へ岬神が祭られ、依代として樹木や石が祭られることが

多い。

国頭のビシの浜に祭られている岬大明神もその一つで海上交通安全の守護神として祭られている。

御神体 自然石

由緒 昔、先田先澄さんという方が、夜漁に行つたとき潮待ちのため久留麻という所で石を枕にして寝ていたら、夢の中で神様が現れ、「わしがサキバル（岬原か）の神である。お前に漁もよくさせるから、わしを祭りなさい」と言われ、目が覚めたら潮時もよかつたので、不思議に思いながら漁をしたら、いつになく漁が多かつた。

先澄さんは神様から言われたとおり、枕にした石を現在ポルトタツクの西の方のウフニチジ（地名）に祭り、国頭の人たちもお参りしたといわれている。

その後、先田先業さんに御託宣があつたというので、御神体の石を久留麻に移し、先田吉秀氏が岬大明神と命名し、周囲を立派に囲い、鳥居が建てられ、浜を見おろし、海を望む景観ともなっている。また社殿は造るものではないともいわれている。

国頭の人たちは、ここで元日の初日の出を拝み、岬大

明神を拝んでいる。旧十五日未明に数人の方たちが毎月

お参りしている。これは息子が船員で航海の安全をお祈りしているお母さんたちということである。

一説にはビシヌハミといつて、ウフニチジに祭り、御神体は黒い石（真石）を三つ置いてあつただけで、根神といわれていた。国頭は不作が多く貧困であつたのが、この神を祭るようになってから豊作が続き生活が楽になつたといわれる。船旅する人の家族は、船出の後ここで海上の安全を祈つた。この三つの石にどんないわれがあつたのか、また現在どうかは不明であるが、三つの石はウワーマイシを思わせるし、真石は神高いといわれており、おそらく海から持ってきたものだろう。

十 中寿神社

古里の重村元信氏宅屋敷内の東南の高台に神社がある。先祖の中文氏の「中」と、寿武氏の「寿」とつて、「中寿神社」と命名されている。ここはかつて世之主時代の監視所の跡で、ここに重村家が屋敷を構えたとき人骨があり、役人が切腹した所と分かり神社を建立したと

いう。

建立 昭和十二年旧九月 重村寿武氏建立する。

祭神 世之主時代にここは南方の見張り所として一番目の所で、ここから皆川の番当を通して世之主の城へ連絡した。それが中山からの使いの船を軍船と誤報したため世之主は切腹し、その責任をとつてこの役人も切腹したといわれ、その勇士の霊を祭つてある。

御神体 杯台

祭日 神月の十七夜祭を行っている。往年はシマ島から参けい者がいたが、漸次減少して重村一族の氏神様として祭られているようである。

祭主 重村ハル氏（明治二十一年十一月七日生）

逸話として、昔、ここに茶がまがあつた。それを島外からきた人が、珍しがって持ち帰ったら、途中の徳之島沖で乗っていた船が遭難し、その人は死んでしまったというので、茶がまのたたりであるうと伝えられている。



20 世之主神社御神体



19 世之主神社



14 金毘羅権現碑



13 金毘羅神社 (正面)



22 招魂社



21 南洲神社



16 菅原神社御神体



15 菅原神社



24 中寿神社



23 岬神社



18 高千穂神社 (側面)



17 高千穂神社 (正面)

○現在の各神社